出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

＜サロン・あべの＞NO．２２　　昭和６３年　４月１６日（土）発行

＜サロン・あべの＞三月の出会い

もどり寒波も、雨も去って一転春らしく暖かい一日となった三月一九日（土）の午後、＜サロン・あべの＞は、仁徳天皇御陵がある百舌鳥古墳群の中に大きく開かれた大仙公園（堺市夕雲町）内の堺市博物館を見学した。

リフトバスでの参加組と、現地参加者合わせて二一名が、三々五々、思い思いの感想や会話を交わしながら、館内を巡って行った。館内は、うわさどおり障害者（主に車イス）に親切な設備が整っていた。

通路は、広く、陳列ケースは低めで見やすかった。

◆◆　歴史の流れを思う

入口を入ると常設展示会場になっており、堺の歴史が、古い時代から順に、わかるように出土品や復製品等が展示されている。

一番に目に入ったのが、実物大に復元されたカヤブキの弥生式住居とその周囲のケースに陳列されている、古墳の上や周りに並べられていた馬や器の埴輪であった。

中世の堺は、自由都市として栄え遠くはルソンまでも足を伸ばし、南蛮文化との出会いがあり、当時の町衆の隆盛を誇る品々がつぎのコーナーに展示されていた。

ガラスケースに納められていた物が多い中で、祭礼用の山車は、祇園祭の山車に似た、二階立て作りで華やかな胴巻を付けて、その四つの角には、大きな紅い房飾りが重く下がっていた。木の車輪も珍しく、ロープ囲いを幸いに視力障害者の人も手で感触を味わえた。

堺の花形産業であったジュータンを手織りした、緞通織機も手で触れることが出来た。

信長・秀吉のころの堺の町並の模型。ザビエル・信長・利休・秀吉・家康の声をコンピューターで復元したモンタージュボイス。火縄式の堺銃。江戸時代の堺の商家の店先の復元。その他百舌鳥八幡宮などの秋祭りに担がれる蒲団太鼓や祭りちょうちんの壁面いっぱいの飾り等、大型で華やかな物と、対象的に繊細で緻密な蒔絵の花見重箱や、珍しい時代絵の屏風、掛軸等中世から近世の堺がある。

近代のコーナーで、学徒動員の苦労、焼夷弾投下の戦災跡が生々しい写真の前では

与謝野晶子　歌と書のハーモニー

現在の平和を思い足が止った。

◆◆ 時を忘れて陶酔

一番奥の特別陳列コーナーには、「与謝野晶子　歌と書のハーモニー」が展示されていた。

堺が生んだ与謝野晶子は、明治ロマン主義を代表する歌人で大正期以降は、社会評論家・教育家としても活躍した。

今回の陳列作品は、単独で作った巻軸、他の芸術家と合作した作品や出版物の装幀にも彼女自身の芸術性と趣向が感じられる「歌」と「書」の作品が中心で、歌巻「倚欄集・晩晴集」「源氏物語礼讃」、歌幅「詩と女」「月光」、短冊「山の日に」、色紙「ほのかにも」「黒髪」「琵琶湖」「勧進帳」、歌稿「心の遠景」（初版本）、「よしあし草」「明星」辰歳九号等が展観されていた。

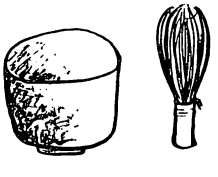
地下ギャラリーでの第二八回堺美術展も併せて観賞。

沈丁花の香りに送られて、博物館を後にした。

伸庵庭拝観

冨田慶子

博物館に向かって右側のしっとりと落ち着いた門構えの中に、堺茶室伸庵が在ると聞き、帰りの時間を気にしながら、せめてお庭だけでも拝観したいと門をくぐりました。石畳みの道が直線に延びて、その右手はこんもりとした竹林。左手に茶室があり、その手前の砂利石のなだらかな登り坂を飛石が足に呼びかけてくれるまま、歩を進めていくと築山状の場所に出て、見晴らしがよくなりました。草木はまだ春の目覚めからさめていない様でしたが、新緑の頃の美しさはさぞやと思われました。降り口につくばいがあり、その足元に水琴窟が埋っているとのことでした。水を小さな石積みの上に注ぐと、地中の底からかすかなながら澄んだ音が、キンコロリンコロと聴こえてきました。「これだけでも、来たかいがあったね。」の言葉にしばし時を忘れ、博物館一巡の疲れも消えているのに気づきました。茶室では、お薄を立てて（３００円）下さるそうでしたが、次の楽しみにして竹林の風を聞きながら帰路につきました。



福祉にロマン
かよいあうハート

ふれあい広場

地域社会でしあわせに暮らしたいというのは
誰もの願いです
みんなで、からだで、こころで
ふれあいましょう

三月二七日（日）　東住吉区の大阪市身体障害者スポーツセンターで「88ふれあい広場」が、開催されました。

前日の雨のせいでしょうか、冷たい風が吹いていたにもかかわらず、たくさんの作業所やボランティアグループによる、模擬店や展示を見るために、たくさんの人々が集いました。

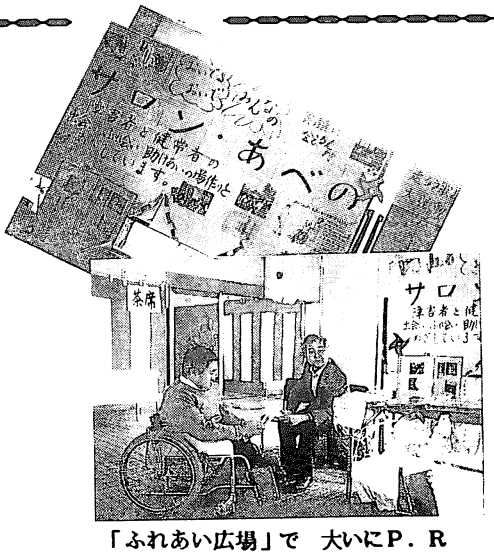
わたしたちの〈サロン・あべの〉も、日頃の活動をパネルに表現、行き交う人々にサロン紙等手わたし、アピールを行いました。

たくさんの人々、特に子供たちが多くてとても、にぎやかでした。少し寒い日でしたが、まずまずのお天気で、屋外の模擬店は大繁盛、早くに売り切れてしまうところもありました。しかし、それに比べて屋内の展示には、興味を持って見てくださる人も少なく、残念におもいました。（上平）

対面会話が出来るレイアウトを

石田　律

「私たちは、こんなことしてます」
「ぼくらは福祉のことでこんなこと考えてんねん」
「こんな道具、使い勝手ええでェ」
など日頃思っていること、していること、あるいは作っているものを展示して、来場の人たちに見てもらい、特に興味をもつ人には、説明もし、パンフレットやチラシ、新聞などの機関紙・誌類を手渡して、より一層理解とコミュニケーションを…



「ふれあい広場」で　大いにP．R

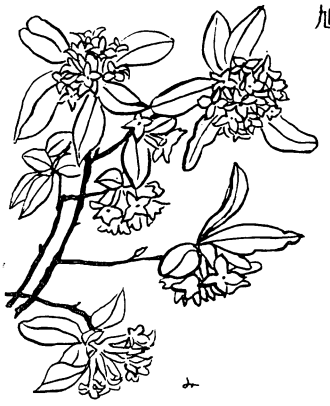
どちらかといえば、一番地味なPR手段といえるかも知れません。けれど、一番、手応えがあるものでもあります。これを期待して、今回の「ふれあい広場」に、はじめて参加したのですが、展示コーナー全体のレイアウトが通り一辺で、肩すかしでした。

貼ればいい、置ければいいといように、画一的に一グループに、机とパネルを与えられ、機械的に区切られているだけで、隣との間がなくパネルと机の間もくっついているので、われわれの立っている場所・居場所がないのです。自然、机の前に立つことになります。これでは、心理的にも物理的にも隔った感じで近づいて見てもらうことはおろか説明も十分出来ません。ましてや、車イスはただ通過するだけに終ってしまったようです。途中からグループによってはパネルと机の間をとるところも出ましたが、隣との机のツラが合わず、逆にみずらいものになっていたし、出っぱりが両隣の迷惑にも、なっていました。

催全体からみての展示コーナーの場所云々は、ともかくとして、展示コーナー自身のレイアウトは、対面会話が出来るものになっておれば、もっとよかったのに、と悔まれてなりません。

THE DEAF MUTE 13

旭　純子



手話通訳

手話通訳とは健聴者の話言葉をろうあ者が理解し易いように手話に置き換えて伝え、ろうあ者の表現する手話の意味内容を正確に読み取って、話言葉に還元して健聴者に伝えることによって、ろうあ者のコミュニケーション介助をすることをいう。ろうあ者のコミュニケーション障害の克服に重要な役割を果たす手話通訳への要請が強まるのは、ろうあ運動が高まりを見せ始めた昭和三十年代になってからであり、それまではろうあ者のコミュニケーション保障はほとんどなされず、社会参加への道は大きく阻害されていた。昭和四十五年、厚生省は、ろうあ者の地域社会生活の円滑化をはかるため、市民の奉仕活動育成を目的に手話通訳奉仕員養成事業を開始した。その後続いて手話通訳の設置、派遣の事業が施策化されている。しかし、手話サークルとしては昭和三十八年、京都に発足した「みみずく会」がある。これは病院に入院中のろうあ青年の状態を通じてろうあ者の苦悩を知った一看護婦が始めたもので全国の先駆けと言われている。その後手話サークル設立の気運は高まりを見せ、大阪では昭和四十八年に「なにわ」が設立され、翌年には筆者の活動拠点でもある「つくし」をはじめ、府下各市でもいくつかのサークルが結成された。

自立（6）

編物、スポーツ、料理…に忙しい毎日を送っておられる中西利香さんに今号と次号の二回ご登場いただきます。
まず今回はスキーの話…

スキーと私

中西利香

私が初めてスキーをしたのは、成人式の年でした。私は、何か自分の心に残る事をしておきたいと思い、何かないかなぁ、そんな時友達にスキーに行ってみないかと誘われて、えぇ、私がスキーなんて出来る訳がないと思いましたが、まぁいいや、雪だけでも見に行こう、それが私のスキーの始まりです。

大阪市身体障害者スポーツセンターで身体障害者スキー教室の募集があり、私も参加しました。生き先は長野県飯山市です。

参加した方は、肢体不自由、視覚障害、聴言障害です。

スキー教室なので、時間がとても規則正しく、私はうろうろするばかりでした。何もかもが初めてなので、スキー靴を履くことも出来ませんでした。スキーの板を先生につけてもらい、滑るどころかドスンと大穴をあけてしまいました。一回目は、とてもとても滑るどころではありませでした。二回目、三回目と行きましたがあまり進歩はしなかったけれど、それでもすべる楽しさだけは分かるようになりました。

先輩の紹介で四回目のスキーに挑戦することが出来ました。りんごの会のみなさんと長野県峰の原高原にバスや自動車で、ナンバの体育館の前から十時間くらいかかって、ペンションについてほっとする間もなく、またバスでスキー場に行きました。初めてゲレンデに立って、胸がわくわくしてちょっと不安になってきました。

ここから下の休憩場まで滑って降りることが出来るのかな…。まぁやってみよう、滑るのではなく、転がると言ったほうがよい。木にぶつかったり、デコボコの崖から落ちそうになったり、私は怖い思いをたくさんしたけれど、その度にりんごの会の人達に助けてもらいながら、ようやく三時間ぐらいかかって休憩場まで降りることが出来ました。ほっとするやら、おしりが痛くて、体がバラバラになってしまったように感じました。でも私は、スキーがとても好きになってしまいました。

家に帰って来て、日々が過ぎ、いろいろ楽しかったことが思い出されます。スキーは下手だけど、またチャンスがあったら、連れていって欲しいと思っています。

＊　＊　＊

「りんごの会」（岡本敏己　代表）は七年前、障害者とボランティアの人たちが、長野のリンゴ園へ旅行した際、会を作ってはと、いうことに話が進んで、生まれた。以後、春は花　夏は水　秋は紅葉　冬は雪を求めて、みんな楽しく、にぎやかにやっている。

（編集部注）

87年 主な出来事

＜サロン・あべの＞は、この一年健常者と障害者の出会い、ふれあいの場を求めて集いを開いてきました。主テーマとして「障害者と結婚」を企画した時は、淵を覗く怖さがありました。が、回を重ねる都度見えて来たのは、人間としての本来の姿でした。「人間て、いいもんや」と云う言葉を実感しました。

＜サロン・あべの＞こんな出会いがありました。

昭和六二年

四・一八 ●電話の「ふれあい」が拡がります
福祉電話機器のいろいろをNTT阿倍野電話局の茂田・中田両氏に聞く。

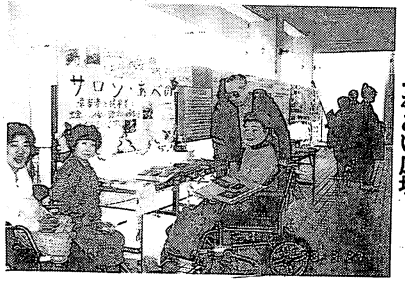
五・一六 ●結婚――その以前にあるもの
障害者の「結婚」について、話し合う。

六・二〇 ●結婚――その出会い
障害者の「結婚問題」について、実例を交えての田中逸郎氏の講演。

七・一八 ●夏バテ防止――この一品
阿倍野保健所管理栄養士＝西村節子氏と、阿倍野老人福祉センター保健婦＝森登美子氏による食生活のあれこれ。

八・二三 ●あべのカーニバル
第一四回あべのカーニバルにバザーで出店。地域の人達との出会い・ふれあいの場を持った。

九・一九 ●結婚――その生活（聴覚障害者を中心にして）
新婚三ヶ月の辻田夫人と、子育て真最中の上野夫人に、聴覚障害者どおしの結婚生活について話を聞く。



ふれあい広場

集いやサロンで出会った皆様には、どのようなご感想をお持ち下さったでしょうか。
出口正敏氏、町野旬子氏、原田仁氏の三人の方に聞きました。

●●●●サロン紙を通して

町野旬子

サロン・あべのを知ったのは、新聞紙上にお誘いの記事が出ていた時ですが、それより先に世話役冨田さんのお名前を見つけがんばってられるのだなぁと思いました。

冨田さんとは、もう十二、三年障害者グ

九・二一　●本紙入賞
府社協　福祉広報紙コンクールで、優良賞を受賞。

十・一七　●ボウリング大会――スポーツの出会い
長居の市立身体障害者スポーツセンターで、初のボウリング大会を開く。

十一・一四　●交流会――ミニハイキング
あべのボランティア・ビューロー、阿倍野区老人福祉センター主催の交流会に参加。秋の陽の下、長居公園で楽しく遊びごころを解放。

十二・五　●手づくりの、ハッピー・クリスマス
参加者のかくし芸、紅白に別れてのゼスチャーゲーム。全員合唱等、なごやかなクリスマスを開く。

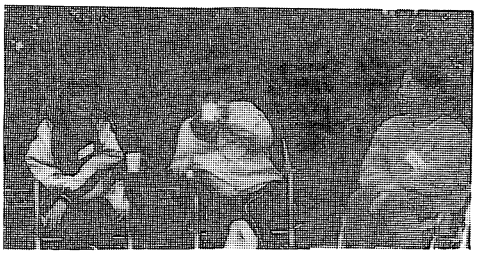
十二・九　●阿倍野区ボランティア交流会（第二回）
地域のボランティアグループと地域婦人会・保健所の方々と交流。

昭和六三年
一・一六　●にぎやか新年会
あべの・ベルタで「にぎやか」な新年会を開き、話の花を咲かせた。

二・二〇　●車イスが見た韓国、ハワイ
車イスで韓国、ハワイを旅された南光龍平氏に両国の様子と障害者の外国旅行について聞く。

三・一九　●「与謝野晶子　歌と書のハーモニー」
リフトバスで、堺百舌鳥にある大仙公園内の博物館見学。堺の歴史、と与謝野晶子の「歌」「書」を観賞する。

三・二七　●「ふれあい広場」展示部門に参加
大阪市社協他主催の障害者と健常者の「ふれあい広場」での出会いを求めて参加する。サロン・あべのを紹介したチラシと本紙二一号配布。サロン・あべの活動を撮った写真等を展示してPRする。


楽しかったミニハイキング

ループ「まごころの集い社」の会員として懇意にしていただいております。

丁度、昨年五月「まごころの集い社」の総会が島根で行われる際、車が一緒でサロン・あべののお話をする機会がありました。帰宅後、サロン・あべの十一号より、お送り下さり拝見させていただいて居ります。

未だ一度も会には出席した事はないのですが、いろいろな障害をお持ちの方が集り、これ程　和気あいあいに活動なさるのを唯々感心させられます。毎回紙面からは、温かさと勢いを感じます。

今後共、サロン・あべのの前進を期待します。皆様がんばって下さい。

●●●●皆さんにお会いできて

出　口　正　敏

初めてお会いできたのは、昨年の初夏の事のように思います。

年金についてのお話があるという毎日新聞の「催し」欄がキッカケでした。駆け出しの社会保険労務士なのでそういう催しな

り、講座は時間の許すかぎり受ける努力をしているところでした。

〈サロン・あべの〉を知ることができて、私の従来の認識が変りました。

先ず、皆さんが屈託のない生き方をされていることです。そして、自分自身をしっかりとみつめて生きておられる、さらに、各々が自力で模索しながら互いに寄り添い、力を合わせてこれからを行きぬこうとしておられる真剣な姿に接して深い感動を禁じえなかったことを覚えています。

六十余年を生きていろいろの体験を経てきましたが、世間に甘ったれていた自分が恥ずかしくてなりませんでした。これからも機会を見つけては、皆さんに触れ合わせてください。

私の勉強を通じて、皆さんのお役に立てる日の来ることを願ってもおります。

初のボウリング大会

●●●●

楽しく　実感　サロンの出会い

原田　仁

やっぱり楽しいですね。皆んなで出かけるのは。バスに乗ってワイワイガヤガヤ、やりながら行くっていいもんです。あゆみ号のリフトも便利で、あんなの僕の車にも付かないかなと思ってしまいました。

博物館のあった大仙公園は、新緑にはちょっと早かったですね。あそこはもう少したつととってもきれいで、何しろ広いですから走り回るにしても、寝ころぶにしてもいいところなんです。ぜひまた、お弁当でも持って行きたいですね。

というわけで、とても楽しかったんですが、実は僕、ひそかに考えてたんです。今さらこんなこと書いても卒業取消すなんて言わないと思うので書きますが、僕何も勉強してなかったんです。だからこうして皆んなで出かけるとなると、車イスの押し方は知らないし、手引きの仕方もわからない。手話なんてもちろんできませんし困ってしまったんです。

沈丁花香る大仙公園

サロンの皆さんにいろいろ教えてもらわなければ。

それと、きっとこんなこと知らなかったのは僕だけじゃないと思うんです。だから街で障害者の人を見てもどうしていいかわからない。聞けばいいんだけど、聞けないんですよね。気軽には。

だから僕は、サロンの皆さんに習ったことをできるだけ多くの人に話さなきゃいけない、書いていかなきゃいけないと思ったんです。

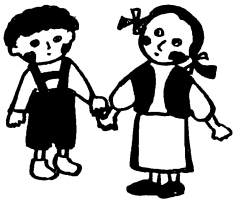
こんなことを改めて考えさせてくれたってことでも、皆んなで出かけたことはとっても良かったと思いました。

'88 国際福祉サミット

四月九日（土）午後　天王寺区にある大阪国際交流センターにおいて、世界自立促進協会（ＷＡＰＩ）主催の「'88　国際福祉サミット」が開催されました。

会は司会者の角淳一（毎日放送）アナウンサーと石黒マリーローズ（レバノン）言語学者の挨拶、ボーイスカウトによる参加国国旗入場、木下由紀子さんの開会宣言、五人の子供達の踊りで始まりました。

パネリストは六名おられ、コーディネーターのヘンリーニノミヤ氏により、各自紹介されました。国連のＥＳＣＡＰ局長のエドワードバンロイ氏、アメリカのバークレイＣＩＬ所長のマイケルウインター氏、西ドイツのみどりの党の本部・障害部長ロタール・サンフォード氏、中国からは中国障害者募金団協会の王魯光氏、日本は、中国の山ミネヤコンカで遭難し、九死に一生を得て帰国された松田宏也氏、彼はこの遭難で十指と膝下を失われたとのこと。タイからは、全盲のピアニストであるマーティン・スリマイチャイ氏等が出席されました。



そして、ご自分達が活動されている機関や国内の障害者活動について話をされました。皆さん方は、自分自身の甘え、社会の差別、隔離等はいけない、これらを乗越えて、チャレンジして、自由と社会参加を闘い取らなければいけない等と、ファイト溢れるお話でした。これらは、二ヵ国語で同時通訳されていました。

二部に入る前に「お能」の謡いと男舞があり、その朗々たる響きに芸の奥深さを感じました。

二部は、"自立のケーススタディ"としてスキューバダイビングに挑戦された車イス障害者のフィアーナさんの話と、中途失明になった後よりマラソンに挑戦され、ついにフィリピンでトライアスロンを完走された杉本博敬氏の話がありました。

その後、場所を移してウエルカムパーティが開かれました。壇上のファイトマン達が身近に来られて、話が出来たことは、幸せでした。又、参加された方々の中にお顔見しりの方もおられ、知人を紹介してもらったりして、楽しい交流会となりました。

（冨田）

おしらせ

＜サロン・あべの＞五月の出会い

日　時　昭和六三年五月二一日（土）
　　午後一時～四時

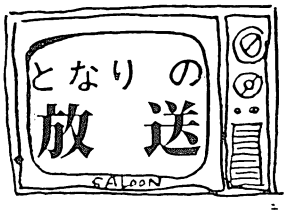
場　所　育徳コミュニティーセンター二階
　　研修室（スロープ・車イストイレ有）

内　容　「ストレスて、なんやろ…」
　　講師：久米田病院心理担当検査技師
　　北田伸彦氏
　　（手話通訳有り）

会費なし（カンパ大歓迎）

問合わせ先　☎〇六－六九一－一〇二八冨田

日々のよろこび添えて
＜サロン・あべの＞に贈る〃灯〃
三月のカンパ合計四六〇〇円
ありがとうございました。



西村勇三　展

［洋画家　育徳ギャラリーでも個展をされた方です］

日　時　4月15日（金）
　　～20日（水）

場　所ナルミヤ戎橋画廊
　　２Ｆ大阪市心斎橋筋
　　戎橋南詰☎06-211-0435

＜サロン・あべの＞第２２号
発行日　昭和６３年　４月１[illegible]
発行・編集＜サロン・あべの＞[illegible]員会
［大阪市阿倍野区[illegible]-3-26
電話(06)691-1628冨[illegible]］
印　刷　セルフ社　電話（06)65[illegible]0337
［阿倍野区阿倍野筋4-18-19 ］
定　価　￥６０．

編集後記

堺市博物館見学の当日、＜サロン・あべの＞の例会に初めてという方が３名、集合場所へお起しになり、なかの１人の方とは、ごいっしょ出来ました。が、他の２人の方たちは「急に用事を思い出しましたので…」、「介助なんてとても私には…」と、それぞれの理由をおっしゃって、バスには乗られませんでした。

新聞なり、なにかをご覧になって、折角、参加しようという気持を起されたのに、都合で途中お帰りになり、ごいっしょ出来なかったのは非常に残念でした。次の機会に、ぜひふれあえることを願っています。（石）

小嶺広倫様よりハガキ５５枚頂きました。ありがとうございました。